

イノシシの生態を探る

1. 捕獲を埋め合わせ強力な繁殖力

イノシシは一度に3～5頭ほどの子どもを産む。生まれたばかりの子どもは小さく、体には縦縞があって、うり坊と呼ばれる。1歳まで生き残る子どもは半数ほどであり、母親は毎年2頭ほどの子どもを残すことになる。1産1子であるシカやサルなどに比べて繁殖力が高いため、捕獲による数の制御には格段の努力を要す。このため、被害防除や生息地の管理が一層重要である。



調査地に出現したイノシシの親子

2. 柔軟な活動性

人間の影響の強い地域では図のように夜行性を示す。一方、人間の影響が少ない(危険が少ない)地域では、昼間に活動することが知られている。野生動物の多くは生活環境に柔軟に対応して、その活動パターンを変える。用心しておかないと、人気のなくなった地域では昼間にイノシシが出没するだろう。

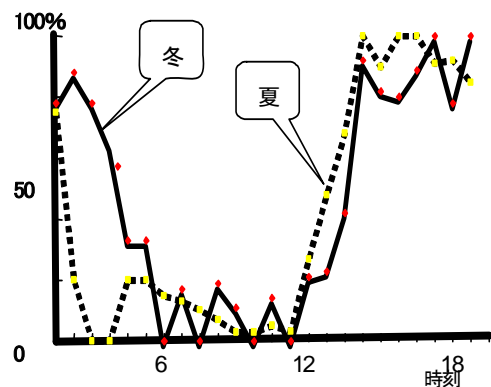


図1 各時刻における活動率

3. 意外と狭い行動範囲

テレメトリ調査からは、行動範囲が1 kmほどの狭い個体が多いことが分かった。すべてのイノシシが狭いわけではないが、特定の地域に被害が集中している場合は、近くにイノシシが定住していると考えた方がよい。

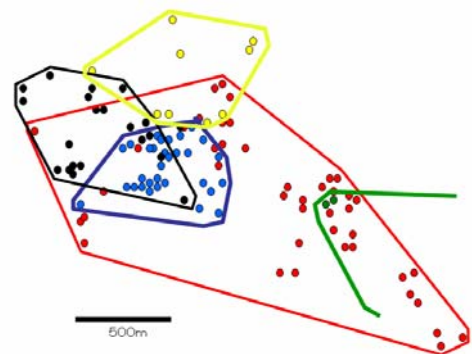


図2. 各個体の行動圏(点は各個体の位置)

被害対策のポイント

1. イノシシは繁殖力が高いため、駆除だけで個体数を制限することは難しい。そのため、被害防除や生息地管理がより重要となる。
2. イノシシは昼でも夜でも行動することができる。人間の影響が強いと夜行性に、弱いと昼行性を示す。安易に夜行性と思うと危険。
3. 行動圏は意外と狭いため、特定の地域に被害が集中している場合は、被害地近くに定住する個体を駆除しないと、被害は収まらない。

<課題名> 都市近郊中山間地域におけるイノシシの行動及び生態学的特性

<目的> 野生鳥獣による農作物の被害問題が深刻化し、中でもイノシシによる被害が甚大である。このため、イノシシの生態及び行動特性を踏まえた効果的な被害対策が急務である。テレメトリ調査や痕跡調査等によりイノシシの生態や行動特性を調べ、これまで経験的に行われてきたイノシシの被害対策を計画的で効率のよくするための科学的知見を得る。

<成果の問い合わせ先>

仲谷 淳 (なかたに じゅん)

中央農業総合研究センター 鳥獣害研究サブチーム

茨城県つくば市観音台 3-1-1

電話 : 029-838-8928

メール : sanglier@affrc.go.jp